

CONTENTS

**カントボーイ(乳首開発中)が
おちんぽケースの自覚を持つ話♡**

含まれる要素

**カントボーイ
クリイキ
乳首責め
玩具責め
挿入
イラマチオ
首絞め
言葉責め**

人物紹介

四季風瑠夏（しきなぎ るか）

183 センチ/68 キロ

顔がとにかく良い。自分の名前が好きじゃない。
目が悪い+目立たないために黒縁眼鏡をかけている。
両親は幼い頃に離婚しており、父と二人暮らし。

父が女の子を望んでいたこともあり、中学生まで、
家で女の子の服を着せられていた。声変わりし、
身長が伸びてからはなくなったが、性的虐待も受けていた。
その頃の記憶が、性格を歪ませている。
冬野に執着している理由は、過去の自分と重ねているから。

冬野稀（とうの まれ）

168 センチ/52 キロ

カントボーイ。それ以外は至って普通の学生。

四季風の顔が好き。流されやすい。

自分の名前にコンプレックスを感じている（その名前が自分の異常さを言い当てているように感じるため）。

カントボーイ(乳首開発中)がおちんぼケースの 自覚を持つ話♡

冬野稀は、誰にも知られてはいけない秘密を持っている。

性自認は男だ。力は弱いし、筋肉もつきにくいけれど、骨格は男。普段も男の格好をしているし、男として振る舞う。女に間違えられたことなんて、今まで一度もない。

けれど下着を脱げば、そこには女の特徴がある。子宮もあるから、生理も来る。生で男とセックスすれば、妊娠する可能性だってある。

冬野は、そんな自分の身体が嫌いだった。

名前も、同じくらい嫌いだった。

稀——めったにない、珍しい。親がどんなつもりでつけたのかは知らない。ただ冬野にとっては、自分の異常さをそのまま言い当てられているようで、呼ばれるたびに肌が粟立った。

普通の世界に、自分は存在できない。誰とも深い関係を築けない。

そういう人生しか送れないのだと、何もかも諦めていた。

——四季風瑠夏に出会うまでは。

四季風とは、高校二年で初めて同じクラスになった。

顔が良くて、背も高くて、とにかく目立つ男だった。だから当然、遠い存在だと思っていた。なのにどういうわけか声をかけられて、気づけばつるむようになっていた。

四季風は、他の連中と違った。冬野が体育を見学していても、着替えをトイレで済ませていても、理由を詮索してこない。その距離感が、ありがたかった。

多分、人にあまり興味がないんだろう——と、冬野は思っていた。四季風は何をしても目立つから、それなりに煩わしい思いをしているようだったし、自分のような存在は好都合なのだ。冬野は人を避け続けているから、誰も話しかけてこない。そんな冬野の隣にいれば、四季風も声をかけられずに済む。

……けれどその実、四季風はすべてを知った上で、冬野に近づいていたのだ。

『そんな君だから、僕は声をかけたんだ』
『おちんぼケースとして育てるの大変かな？ と
思ったけど、そんなことなかったね』
『拒否されたら、僕、なにするかわかんない』

そう言い放ってきた四季風に抱かれてから、二年が経つ。

高校を卒業して、四季風と同じ大学に進んだ。
ルームシェアを始めて、毎晩当たり前みたいに抱かれる。

なぜ四季風が自分にここまで執着するのか、冬野は未だにわからない。



肩を押されて、冬野はベッドに倒れ込んだ。見上げた先に見える四季風の淡い瞳に、灰色の光が宿っている。

「まだ、するのか、」

「たりなくて」

「……もう、つかれた、」

身を振り、枕に顔を埋めると、四季凧が背中に覆いかぶさってきた。ちゅ、とうなじに吸い付かれて、身体に力が入る。絡められた指先がじんと痺れて、冬野は思わず息を吐いた。

「ごめんね。君は寝てていいから」

「……昨日もそう言って、上に乗らせたくせに…
…！」

「君のすきなことしかしない。約束する。だから、
ね？」

むくむくと育つかたいものを、尻に擦りつけられる。それだけで、耳まで熱くなる。

「想像した？ えっちだね」

「おまえに、言われたくない！」

「僕は自分で認めてるもん。これでも手加減して
あげてるんだから、さ」

「っ、」

蜜口に指が食い込んで、冬野は息を詰めた。容赦なく中を蹂躪する指をすんなりと受け入れてしまう身体が憎い。

「あ、……っ♡ ッあ、う……♡」

「ふふ、もう腰へこへこして、かわいいね」

耳元で囁きながら、四季凧は指を増やしていく。

お腹側の薄壁を指の腹で撫でられるたび、腰が勝手に浮いた。恥ずかしい水音が部屋に響く。

「こんなに濡れてるし、もう挿れても大丈夫そうだね」

指を引き抜かれて、代わりに、比べ物にならない質量が蜜口にあてがわれた。先端が浅く沈んだだけで、待ち構えるようにひくりと震えた。

「——ッ、あ、あ……っ♡」

ゆっくりと、けれど確実に中を押し開かれていく。奥までみっちりと満たされて、それだけで軽く達しそうになる。

「はぁ……君のおまんこ、何回してもキツキツですごくいいよ」

「っ、ん、……うう、♡」

「いい？ もう動いて」

「……いちいち、聞くな、」

「痛い思いしてほしいももん。ねえ、大丈夫？ 苦しくない？」

「苦しく、ない、けど……」

「けど？」

「～～!! 変な感じする、から……！ はやく動いて、……」

「はは、了解」

四季風が腰を動かし始める。最初はゆっくりと、様子を窺うように。けれど冬野の声が跳ねる場所を見つけると、そこばかりを狙ってきた。逃げ場のない体勢で弱いところを的確に挟られて、冬野は声を抑えられない。

「あ、っ、おお、ああ♡♡」

四季風が、冬野の耳の後ろに唇を落とす。うなじから、耳の裏へ。舌が、耳殻の輪郭をゆっくりとなぞってきた。ぴちゃぴちゃと濡れた音が、鼓膜のすぐそばで響く。

「ひ、……っ、やだ……っ♡」

「え、嘔吐くんだ？」

「あ、」

快感に逸らした首筋に、掌を這わされた。頸動脈を探り当てられて、きゅ、と指に力を入れられると、たまらない。否定したかったけれど、口から漏れるのは甘い声ばかりで、言葉にならない。

「あ、っう♡♡♡」

「ふふ、首きゅってすると、おまんこもきゅってなるね」

四季風の言うとおりであった。指に力を込められ

るたびに中が疼いて、四季風のを締めつけてしまう。それを四季風は、面白がるように何度も繰り返す。

「変態」

四季風はそう言って、さらに指に力を入れてきた。目の前にチカチカと星が飛ぶ。

「————ッ!!♡♡」

「……あれ？　今イった？　なんで言わないの？」

「ああ、うう、……♡♡ごめ、ごめんなさ、……」

「ねえ、なんで今イっちゃったの？　わかんなかったから教えて？」

「っあ、っび、……くび、しめられて……♡♡」

「うん、それで？」

「……イ、った……」

「言葉足りないと思うよ？　変態って言われて余計興奮しちゃったんだよね？」

「っ……………う、うん、」

「へえ？　救えないね」

「うぐ、」

首を強く掴まれて、後ろを向かされる。無理な体勢で唇を塞がれて、舌を絡め取られた。口の端から飲みきれない唾液が伝う。苦しいのに、それ

すらも快感を煽って、思考を奪っていく。

「ん、ん……っ、ふ、……っ♡」

唇が離れたかと思うと、仰向けにされた。繋がったまま体をひっくり返されて、内側を捏ねられる感覚に、冬野は喉を反らす。首を掴まれたまま、今度は奥を突かれた。

「ああ♡♡ぐう……っ♡♡」

「はは、顔真っ赤」

「や、っ、あっ♡♡　っ、あああ、…っ、くるし、………イ、いぐ……っ♡♡」

「イっちゃうとこ、見せて？　ちゃんと目、開けて、僕のこと、見て」

言われて、閉じかけた瞼をこじ開ける。見下ろしてくる四季凧と目が合った瞬間、羞恥と快感が一緒くたになって膨れ上がった。

「——ッ、イク♡♡♡……ぐう——ッ!!♡」

奥をぐりぐりと押されて、視界が白く染まる。足の爪先が丸まって、腰が何度も痙攣する。快感は長く尾を引いて、なかなか戻ってこられない。

「は……っ、あ、…げほ、……」

「ちゃんといえたね。えらいえらい」

首を絞めていた手が離れて、かわりに頭をわし

やわしゃと撫でられる。そうして達したばかりで締まった中を突き上げられた。いったばかりで敏感になった体に快感が走って、冬野は声にならない声を漏らす。

「ん、っ、あ、まって、やすませて……っ♡」

「だーめ」

腰を掴まれて、何度も奥を穿たれる。四季風の呼吸が乱れはじめて、汗が滴り落ちてくる。

いつも余裕そうな四季風がオスに変わる瞬間が、冬野は嫌いじゃない。

「あ、っ、あぁっ♡♡またイク、イっちゃう、」

「稀くん、……っ、締めすぎ……！」

二、三度、奥を強く叩きつけたあと、四季風が動きを止めた。冬野の中で、四季風の性器が震える。抱き込まれて、腹の奥に熱が広がっていくのを感じて、冬野は身を震わせた。

「……っ、……♡♡♡♡」

四季風が吐精して、しばらく、二人分の荒い息だけが、部屋に落ちる。汗ばんだ肌が重なったまま、心臓の音が二つ、ばらばらの速さで打っている。

四季風が性器を引き抜くと、繋がっていた場所

から、とろりと愛液がこぼれた。四季風が混じることのない白濁をためたゴムを外す。そうしてもう指一本動かさない体に、口づけを落としてくる。最後に顔に唇を寄せられて、「大好き」と囁かれる。

「……君は？ 僕のことすき？」

「……うん」

「よかった」

安心したように笑った四季風に、ぎゅう、と抱きしめられる。

散々好き勝手にしておいて、こんなの、ずるい。



……最近セックスしてない。

まあ最近、と言っても、せいぜい一週間くらいなのだけれど。生理でもないのにこんなに長い間しないのは、初めてだ。

なのに四季風は、誘ってくる様子もない。

「稀くん、どうしたの？ 手、止まってるよ」

「え、あ、うん……」

言われて、慌ててノートパソコンのキーボードを叩く。四季風が下書きを書いているから、

それを自分の言葉に変えて打ち込むだけだ。

「……」

無心でキーボードを叩いていると、不意に、四季風に後ろから抱きしめられた。それ自体はいつものことだ。けれど手はそのまま上がってきて、シャツの上から胸の先を指で挟んだ。

毎日のようにセックスはしていたけれど、こんなふういきなり乳首を触られることはなかったから、動揺してしまう。

「……っ、ん、四季風、」

「だめ？」

「だめじゃ、ないけど、」

振り返れば四季風の綺麗な顔がすぐそこにあって、すう、と細められた目と視線が合う。その顔に弱いのを、四季風は知っている。

「僕のことは気にしないでいいから。ほら、課題やらないと」

「っ、……」

さすさす……♡と、指の腹で擦られる。乳首が布地と擦れて、思わず背中を丸めた。時折うなじや耳の裏に唇を寄せられたら、もうだめだった。今までしてきた行為が、勝手に頭にフラッシュバ

ックする。

まだ回数を重ねていない頃、痛い、苦しいと泣けば、あやすようにいろんなところを舐められた。四季凧は、冬野が耳と首に特に弱いと分かると、そこを執拗に吸ったり咬んだりし、ついには首を絞めるようになった。

女のように抱かれることに順応した身体は、いつしか抵抗することを忘れてしまった。拘束されているわけでもないのに、その手は、机の上から動かない。

「ん、っ……」

また指が動いたと思えば、今度は乳輪の外周をなぞられた。くるくると円を描いて、尖った先端だけを避けていく。触ってほしい一点にだけ、届かない。思わず背を反らしかけて、慌てて姿勢を戻す。

「今胸突き出そうとしたでしょ」

「して、ない……♡」

「してたよ。……ここ、触ってほしいんだ？」

答えられずにいると、爪の先で、かり、と先端を引っかかれた。

「っ……♡」

鋭い刺激に、指に力がはいる。画面には意味をなさない文字列が並びはじめる。

「あーあ、誤字だらけ」

「だれの、っ、せいだと……っ」

「ほら、真面目にやって？」

言いながら、四季風は左右の乳首を同時に摘まんだ。今度はゆるく捻られて、じん、と下腹部に痺れが走る。

「こんなペースじゃ、朝までかかっちゃうね」

四季風はくすりと笑って、手を離した。

「ご飯作ってくるね」

「え、」

「え？ っ。はは、もっと触ってほしいの？」

「……そういうわけじゃ、」

「そっか」

四季風はあっさりと立ち上がり、キッチンへと向かった。

結局、その夜は何もされなかった。

四季風の作った夕飯を食べて、順番に風呂に入り、ベッドに入る。四季風はいつものように後ろから抱きしめてきた。腹に腕が回って、背中にびったりとひっついてくる。けれど、それ以上は何

もない。キスひとつ落ちてこない。

毎日のようにセックスするのが普通になっていたのがおかしいのだ。健全だ。

だけど。

……なんで、あそこでやめたんだろう。

物足りない、なんて。そんなこと、思いたくない。思いたくないのに、体の芯が、じくじくと燻っている。

冬野が腕から抜け出そうとすると、腹に回った腕に力がこもった。

「……ずるい」

小さく呟いても、返事はない。静かな寝息だけが、すぐ後ろで聞こえる。

四季凪が何を考えているのか、なんとなくわかってしまう。だって、冬野が嫌悪してきた身体に快楽を教え込んだのは、他でもない四季凪だ。

また、作り替えられてしまう。

そんな予感を最後に、冬野は眠りに落ちた。

カントボーイ(乳首開発中)が おちんぽケースの自覚を持つ話♡

発行日 : 2026年8月
発行者 : 茉夏乃
X : @manatsuno328
連絡先 : manatsuno328@gmail.com

- この作品はフィクションです。実在の人物・作品・団体・出来事などには関係ありません。
- この本は個人が発行したものです。
- 本書の転載、編集、トレース、転売、使用を禁止します。
- 本作品の著作権は作者に帰属します。
- 購入者ご本人のみお楽しみください。
- AI学習データへの利用を禁止します。

- This is a work of fiction. Any resemblance to actual persons, living or dead, works, organizations, events, or locales is entirely coincidental.
- This work is private individual.
- DO NOT REPOST, EDIT, TRACE, RESELL OR USE MY WORKS.
- All rights reserved. Copyright of this work belongs to the author.
- This work is intended solely for the individual purchaser.
- Use of this work for AI/machine learning training is prohibited.